

R&V

13号

1994年

春号4月～6月



リーダーの資質

山行中、その山行を続行するのに何らかの障害（事故、悪天候、技術不足など）が発生した場合、その山行を続行するか中止するか、はたまたルートを変更するかの決定はリーダーがする。ただしリーダーがそのような判断ができない状態（リーダー自身が負傷している場合など）の時は、サブリーダーが代行する。リーダーは決断する前にメンバーと協議すべきであるが、時と場合（他のメンバーが初心者で相談するに足らないとか、他の者が動揺して冷静さをなくしている時など）によってはリーダー独断でよい。したがってリーダーの責任は重い。リーダーは山行の計画を消化することより、メンバー全員が無事下山することを第一に考えるべきである。しかし、あまりそれを考え過ぎると敗退がとて多くなる。多くの人間の中には、山に入ると風邪気味だとか、どこが痛いとか、天気が悪くなりそうだとか、何かの理由をつけて敗退したがる奴がいる（本当に体調が悪い場合は別だが）。そういう奴は、特にいまから登るルートが悪そうに見えたら、必ずと言って良いくらい、それが始まる。そんなに登るのが恐いんなら最初から来んじゃねえ、と言いたくもなる。そういう奴は、えてして下界では、たいそうベテランぶって、大ボラを吹いていることが多い。そんな奴の言うことをまともに聞いていたら、いつも敗退ばかりになってしまう。だから私は、そんな奴の話は昔から無視してきた。私が思うには、こういう奴は少しくらい岩が登れてもアルパイン向きではない。何回落ちても心配ないゲレンデの5.12を登るより、絶対落ちてはいけないアルパイン4級のほうが、どれほど心理的圧力が大きいのか、アルパインクライマーなら誰でも知っている。こんな奴は自分の登攀技術に自信がないのだ。だからもっと技術トレーニングが必要だし、それよりも、もっともっと精神を鍛えなければ使い物にはならない。そんな野郎は山なんぞ行かないで、ゲレンデで大ホラを吹いてろ、と俺は言いたい。私情になるが、私はこういう奴とか約束を守らない奴は大嫌いである。話がそれてしまったので元に戻そう。だから同じような状況下でも前進する場合と敗退する場合がでてくるのは、しごく当然のことである。メンバーはリーダーの下した判断に従わなければならない。その判断に多少不満があってもしかりである。以前、当会でもこんなことがあった。夏山合宿で黒部に入った時である。その時のメンバーは全員同期の者達であった。だれがリーダーをやってもよかったが、便宜上Yがリーダーになった。BCまで黒4ダムから下の廊下を下って行った。ところが雪渓の状態が悪く、行き詰まってしまった。ここでリーダーは撤退を告げたがメンバーはこれに反発、口論になった。すったもんだの末、Yのこの一言で決着がついた。「今日は俺がリーダーなんだ……」。このメンバーは普段から気心が知れている連中だったのでシコリは残らなかった。私はそこにいなかったの、どうい

雪溪の状態だったのかわからないが、私もこの時期には黒部に何回も入っているの、ある程度想像はつく。年によってはかなり悪く、十字峡まで丸二日もかかることさえある。その時も行けば行けたのかもしれないが、リーダーが撤退と言っているのだから従わなければいけない。また話しが脱線してしまったようで失礼。それほどリーダーの判断に不服なら、最初からその人をリーダーにすべきではなかった。しかし山行リーダーを決める場合、クラブ在籍期間の長い者がリーダーを務めることが殆どであろう。ここにも問題がある。歳が大きい、山歴が長い、岩登りが得意、その位でリーダーは務まらないのである。登攀技術は勿論だが、気象知識、読図やルートファインディング、アルパインレスキュー、野営技術、サバイバル技術など卓越してなければリーダーたる資格はない。これらはスポーツクライミングだけをいくらやっても身につかない。アルパインクライミングをのんびんだらり続けていても身につかない。自分で勉強する気にならなければ進歩はない。のんびんだらり10年者より3年勉強者の方が使い物にはなる。しかしリーダーにふさわしい者の資質として、一番大事なのがメンバーの信頼と統率力である。おおげさな言い方をすれば、メンバーはリーダーに命を預けているのであるから、リーダーは人間的にも信頼のおける人でなければならない。信頼のおける人であれば自然と統率力はくっついてくるのである。信頼のおける者は当然山行経験も豊富なはずである。こうなるとリーダー適任者は、あまりいないんじゃないかと思うかも知れないが、そんなことはない。普通の者が普通の努力をすればよいのである。誰もリーダーになるため山に行くのではない。まず自分が、自分のために、より安全に、より楽しく登るため、そしてどんな状態に陥っても生きて帰ってくるため勉強すればよい。これが自然とリーダーの資質の向上につながるのである。いま当会員をみていると、山には行くが、普通の努力（山に関する勉強）をしている人が少ないように思う（仕事が忙しいのは誰も同じ）。山岳指導員試験を受験する人も当会にはいない。私は地区指導員（一番下のクラス）だが、はっきり言って、指導員資格をほしいと思ったことは一度もない。いつもお世話になっている県岳連に少しでも恩返しをしようと思っても、指導員の資格がないと、そういう場がなかった所以我は受験した。私は会員に指導員になれと言っているわけではない。受験しようと思い、勉強することによって、山に関する総合知識が格段にレベルアップすることは間違いない。たとえば天気図を書ける人が当会に何人いるだろうか。指導員になるか、ならないかは本人の自由だ。会員の奮起を期待する今日この頃である。

（本図一統）

《目次》

1994年 春号4月～6月第13号 ACC-J 茨城

リーダーの資質	・・・	1
集会報告	・・・	4
山行報告	・・・	5
第9回外秩父縦走ハイキング大会	・・・	6
御岳山ー山スキー	・・・	10
94' 春合宿ー鹿島槍ヶ岳北壁主稜(廻)から天狗尾根ピストン	・・・	13
北アルプス・蝶ヶ岳	・・・	16
八甲田山・岩木山春スキー	・・・	19
立山山スキー	・・・	21
ウメコバ沢中央岩峰凹角ルート	・・・	25
中央ア・宝剣岳中央稜ルート～第二尾根ルート(継続登攀)	・・・	27
木曾駒ヶ岳山行	・・・	31
青年海外協力隊に参加するにあたって	・・・	33
ACC-J 茨城会則	・・・	35
友好山岳団体の月報・会報紹介	・・・	43
編集後記	・・・	45

集会報告

(於、スカイラーク土浦真鍋店)

【4月】

4月13日

出席者 本図、高田、鈴木、村上、古山、生井、馬淵、木村、鯉河、菊地

4月27日

出席者 本図、長久保、村上、古山、生井、高田、鈴木、菊地、佐藤、笹沢

【5月】

5月11日

出席者 本図、馬淵、古山、菊地、村上、長久保、鈴木、告、今井、笹沢、
高田

5月25日

出席者 本図、生井、今井、高田、告、菊地、長浜、佐藤、鯉河、古山、
庄司

【6月】

6月 8日

出席者 本図、菊地、古山、村上、高田、告、生井、澤田、坂本

6月22日

出席者 本図、笹沢、菊地、村上、高田、古山、澤田、告、馬淵、坂本

6月30日

出席者 本図、古山、菊地、村上、高田、佐藤

山行報告

1994年 4月～6月 春号

【4月】

4月2～3日	安達太良・指導者研修	L 古山、佐藤
4月 9日	古河市人工壁	L 古山、生井、庄司
4月10日	古賀志・岩トレ	L 生井、古山、庄司、村上
4月17日	外秩父七峰縦走ハイキング	本図
4月24日	北ア・御岳山スキー	L 本図、高田、古山 (生井、村上、車中停滞)

【5月】

5月1～4日	鹿島槍ヶ岳天狗尾根	L 本図、古山、佐藤
5月3～5日	蝶ヶ岳	L 村上、鈴木、長久保
5月2～4日	八甲田・岩本山	L 菊地、広瀬
5月 8日	立山・御山谷スキー	L 古山、本図、高田
5月14日	ウツバタ・映譚正面壁凹角ルート	L 中居 古山、
5月20～21日	八甲田山山スキー	今井、他4名
5月22日	古賀志・岩トレ	L 本図、古山、高田、佐藤、馬淵
5月29日	古賀志山・岩トレ	L 古山、庄司、笹沢、佐藤、

【6月】

6月 5日	鯨姫・東面中央稜・西面第2尾根	L 本図、生井、高田
6月 5日	木曽駒ヶ岳・周遊コース	L 菊地、村上、笹沢
6月12日	御岩山・岩トレ	L 本図、古山、高田、今井、坂本、澤田、 告
6月26日	御岩山・岩トレ	L 本図、村上、馬淵、古山、鈴木、高田、 告、鯉河、澤田、今井、菊地、

第9回外秩父7峰縦走ハイキング大会

1994. 4. 17

本図一統

この行事は、毎年行われている東武鉄道主催のハイキング大会で、今年で9回を数える。参加者は約5000名。これまで7年間登山をやってきたが、現在の自分にはどの位の体力があるのか試してみたくなり参加した。今日の自己目標は、全コース制限時間内完歩である。小川町役場の駐車場に車を止め、軽食をとっていると、早朝5時半だというのに、参加者らしい人達が集合場所の方に行く。たしか出発は6時半の筈と、案内書を見直すのがやはりそうだった。自分も少し早めに行こうと、6時前に小川町駅に向かう。既に2～3百名が出発ゲートに並んでおり、受付を済ませ、後に並ぶ。周りの話を聞いていると、先頭集団の殆どは常連のようだ。なかには全国の登山競争やマラソン大会に出ている人もいる。さらに驚いたことに、この大会は競争ではないのだが、彼らの意識は完全に競争である。その話の中で、早く出ないと林道から山道に入る所で渋滞になり、何十分も待たされるとか、CP（チェックポイント）でも渋滞になるとか、水場の位置とか、いくつかのためになる話もあった。瞬間に人数は5～6百人を越えたのではないだろうか。スタッフが予定時間より15分早くゲートを開けた。出発するとき、記録カードにスタート印を押してもらうのだが、これが大変、皆、我先と、押し合いへし合いになる。でもこれはスタッフが悪い。たとえば駅の改札口のように机を並列にならべ、印を押した人は先に通り抜けるようにすればよいのに、人間の列と直角に一列に机を並べただけなので、印を押し終わった人が出て行く道がないのだ。これでは混雑して当然である。係員がメガホンで「ハンコは押しても結構ですが、人は押さないで下さい」などと半分冗談めいたことを言っているが、参加者には殆ど聞こえない。何とかここをクリアー、すぐ私は自分のトレードマーク、タオルによる鉢巻きおにいさん（おじさんではない）に変身する。歩きだすと、みんな歩くのが速い。それはハイキングという雰囲気ではなく、まさしく競争である。走って行く人もたくさんおり、老若男女すべてが速いのである。よし俺も負けてはいらんねーぞ、とばかり皆のペースに合わせた。しかしこの速さは私のペースではなく、後になってひどい目に合うことになる。第1CPのある官ノ倉山の登りでは何人も追い越した。「おやおや君達、どうしたんだい。スタート前の威勢はどう

したね。君達みたいなことを“菜っ葉の肥やし”と言うんだぜ。所詮、俺とおまえ達とはラベル、いやレベルがちがうんだよ。」と、優越感で胸をはってつぶやく。第1CPを過ぎ、下りになったが、みんなにつられて駆け足で下りてしまった。このとき、もう20数年も痛くなったことのない右膝に痛みを感じた。以前は下山になると苦しめられた膝内障の痛みだ。もしかすると完歩できないかも、という不安が脳裏をよぎる。笠山の登りでは、既に追い越すスピードはなく、追い越されることが多くなった。

「おやおや君達、なんでそんなに速く歩けるんだい。足は痛くないのかい。おにいさんに、あまり恥じをかかせてはいけないよ。」と、うらめしい顔でつぶやく。でも第2CPで“193番です”と言われ、おお！俺もまだまだ速いなあと思った。ここで3分ほど休憩して水を飲んだ。足の痛みは左足の踵（以前骨折した所）まで及び、恐らく休んだら歩けなくなるという考えがあったので、なるべく長時間は休まないようにした。堂平山で5分休みアンパン一個を食べる。剣ヶ峰のCPを過ぎ、白石峠で缶ジュースを2本（一本200円）買い込む。この日は天気が良く、暑いくらいだったので、1リットルの水では不安になったのだが、これは正解であった。次の定峰峠で一本飲むが、ここには売店とか自動販売機があるので、ここで買うこともできる。桜が満開だが、ゆっくり花見を楽しむ気分にはなれない。まだ中間地点を過ぎたばかりなのだ。天気の良いのが、せめてもの幸いである。10分程休んで歩きだすが、初めの5分位は激痛で、きっとピノキオみたいな歩き方をしていたと思う。「おやおや君達、相変わらず元気だね。俺だって最初、君達につられて駆け足をしなければまだまだ……と後悔してるんだ」と、負け惜しみをつぶやく。このコースはエスケープルートが完備しており、各峠から下りることができる。でも下りたいという気持ちはなかった。下りるということは、自分にとって敗北であり、私の性質からいって、又挑戦するにちがいないのだから、もう来なくて済むためにも頑張らなくてはならない。大霧山CPで10分休んで缶ジュースを飲んだ。行動食も持っているが、食べる気にはならなかった。さて歩きだそうとするが、痛くて立てない。特に右膝の痛みが強く、今の私にとって、休み＝リタイヤの状態にあることを悟った。ゴールまでどの位か地図で計算してみると、後16.8キロだ。なんとか歩きだす。歩きだすとそれなりに歩けるようになるのだが、それまでが辛い。どんどん追い抜かれて行く。なるべく邪魔にならないよう道の端を歩く。「おやおや君達、俺は君達のために道を空けてやって、ブッシュの中を歩いているんだぞ。お礼の一言も言っていないかい。」と、グチをつぶやく。自分より若い人に追い抜かれるのはなんとも感じないが、どう見ても年上と思える人に抜か

れるのは、とても悔しい。ばかげたことではあるが、俺は、最近マスコミでよく問題になっている中高年登山者じゃないぞ。？年のキャリアがあるんだ、といった変なプライドが心の片隅にあるからである。やがて二本木峠を通過。ここを過ぎるとエスケープルートはないので、なにがなんでもゴールまで行かなければならない。ここから先に行く人、つまり、完歩をねらう人は懐中電灯必携になっている。なんでも聞くとところによると、遅くなった人達は、真っ暗な中、歩くのだそうである。当然、タイムオーバーになるから完歩証明書は出ないだろう。やはり、皆、自分自身との戦いなのだ。皇鈴山C Pを過ぎ、やっと最後の第7 C P登谷山に着いた。「おつかれさま、ここが最後です。時間は十分にあるので、ゆっくり行っても大丈夫ですよ」と、声がかかる。さらに順番は422番であることを告げられた。右膝と左踵をかばって歩くので、他の所に無理がかかり、足全体にマメができてしまった。これから先、もう登りはないので気分的に楽であるが、別に疲労困憊しているわけではないので、下りであっても後10キロという道程は、痛みと戦っている私にとっては苦痛である。釜伏峠は観光客で賑わっていた。名水百選に選ばれているヤマト水の接待があり、コップ4杯をたて続けに飲む。旨かった。あとは林道を、ただひたすら進むだけだが、ゴールとの高度差はまだ500mあり、遥か彼方である。するとテレビ取材車がやって来て、私を撮っているようだ。「おやおや君達、惨めな私を撮ってどうするんだい。それとも私が男前だから撮っているのかい。それじゃアップで撮ってくれや。」と、頭を隠しながらカメラマンにつぶやく。この映像が放映されたかどうかは知らない。走って行く者、草履に履きかえて行く者、どんどん私を追い抜いて行く。そのうち、後ろから来たおばさんが声をかけてきた。「疲れませんか」「ええ、疲れてもいるけど、それより足が痛くて思うように歩けないんですよ」「そうですか。もう少しだから頑張ってください」「はい、ありがとうございます」。とほほ……、なんとなさけないことよ、熟年のおばさんに励まされるなんて。このおばさんは、歳は60を越えていると思われたが、見るからにハツラツとしており、たいへん魅力を感じてしまった。もちろん恋心というものではなく、一人の人間として魅力を感じただけである。このおばさんの後を追ってみたが追いつけなかった。やがて寄居町の市街に入り、最後の力を振り絞り寄居駅前ゴールに到着した。駅前には、すでに到着した人達がくつろいでおり、和やかな雰囲気であったが、私は動けなくなる恐れがあるので、そのままホームに向かうことにする。所要時間10時間5分(制限時間12時間)533番であった。完歩バッジとTシャツと完歩証明書を戴く。全コース40.2km制限時間内完歩(一 구간を除き標準タイム以

内で通過。ただし全コースを標準タイムで歩くと13時間かかり、タイムオーバーになってしまうので完歩はできない) という目標は達成したが、とても満足できるものではなかった。

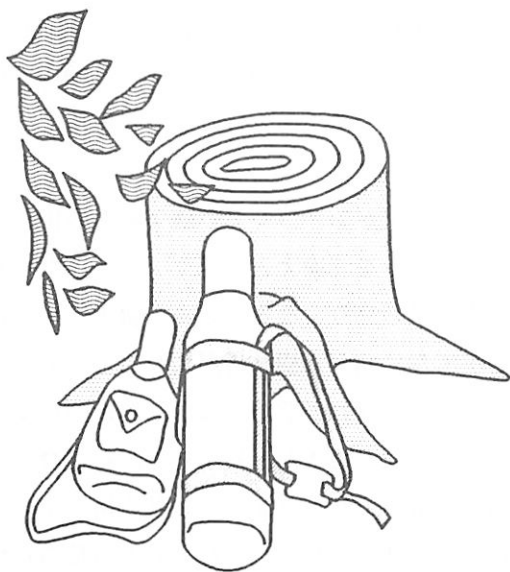
資料による脚力判定基準では、全コースを10時間以内で歩いた人は超健脚、と書いてある。すると残念ながら私の脚力は、超健脚には少々及ばなかったことになる。

寄居から電車で小川駅に戻り、ホームに降りたはよいが、なかなか歩けず、多くの乗客のいる中、みっともないので普通に歩こうとするが、やはり壊れたピノキオしか演じられなかった。こんなに足を痛めてしまって、春山合宿は、はたして行けるのだろうか。「おやおや君達、又、来年逢いましょうなどと、お世辞言ったって、俺は金輪際二度と来ねえぞう。」と、あっかんべーをしながらつぶやき、小川町を後にしたのだった。

小川駅前スタート (6:15) - 官ノ倉山第1 CP (7:16) - 笠山第2 CP (9:23)
- 堂平山第3 CP (9:57) - 剣ヶ峰第4 CP (10:14) - 大霧山第5 CP (12:15)
- 皇鈴山第6 CP (13:53) - 登谷山第7 CP (14:20) - 寄居駅前ゴール (16:20)

(本図 記)

P S. でも小川町はとても素晴らしい所で、東武電車の乗り心地も非常に良かったですよ。みなさん一度、東武電車で小川町に行って下さいね。←お世辞
菜っ葉の肥やし→掛け肥えだけ→かけごえだけ→掛け声だけ



御岳山一山スキー

1994. 4. 24

パーティ L 本図一統、古山正文、高田暢年

御岳山は標高3065m、日本百名山のひとつである。ふもとにある《おんたけスキー場》は5月の連休まで営業しているスキー場である。（といっても雪があるのは上部のゲレンデだけ）このスキー場のゴンドラを利用すれば、日帰りで頂上を踏んでスキーで滑って帰ってこれる山である。しかし場所が遠いのが唯一の欠点である。4月3日に本図さん、中島さん、私の3人で来た時は強風の為ゴンドラが動かず（天気は雲ひとつ無いど快晴）仕方なく下のゲレンデで3本だけ滑ってむなしく帰って来たことがある。その時の交通費が一人8千円位かかった。

今回はその時の教訓をいかし他にも人を募ったところ、生井さんと村上さんが御岳山登頂後徒歩下山で参加することとなり全員で5人となった。

今度こそはという願いを胸にひめ《おんたけスキー場》を目指す。距離はあるが、ずっと高速道路なので時間はさほどかからない。（しかし金がかかる）

スキー場の駐車場は前回より車の数はずっと減っていた。駐車場の一番奥に止め、古山さんの買ったばかりのゴアライトのテントを張り、早速一杯やってから寝ることにする。

翌朝目が覚めると、なんと雨が降っているではないか。又今回もだめかなと思いながらも朝食を食べ暫く様子を見る。風はないのでゴンドラは動いている。やがて雨も小降りになってきたので、スキーパーティのみ行けるところまで行ってみることにする。

ゴンドラで標高2200mまで上がる。ゴンドラ終了駅から田ノ原まで道路沿いにいけば簡単に行けたものを、ルートを間違えとんだヤブコギとなった。

しばらく田ノ原を歩くと樹林帯の登りとなる。スキー靴とスキー板を背負っての登りはなかなかこたえる。やがて左に曲がり樹林帯が切れると王滝頂上に続く大斜面が現れる。王滝頂上に小屋が見えるが登れど登れどなかなか近づいて来ない。すでに雨は上がり時々晴れ間も見える様になってきた。私がだらだらと登っているうちに、古山さんと本図さんは王滝頂上に着いてザックをおろし私を待っているではないか。

『あ～、早く俺もあそこに行ってザックをおろしたい』と気持ちは焦るが、体がなか



御岳山頂上にて…本図、高田、古山…

なか上がらない。やっとの思いで王滝頂上に着くが、御岳山頂上は更に奥にそびえ立っている。王滝～御岳山間は積雪は少なくスキーでは滑れないので、ここに荷物をデポして御岳山頂上を踏んで来ることにする。一瞬頭の中を『ここで一人で休んでいたい』という考えがよぎったが、ここまで来てピークを踏まなかったら後で後悔するのはみえみえなので、二人の後をついていくことにする。この山は宗教的要素の非常に強い山で、夏山シーズン中は大勢の信者が白装束に身をまといこの山を登るのではないだろうか。山の斜面からは硫黄が吹き出しており、より一層この山を神秘的なものに演出していた。ピークを踏み王滝に戻ると行動食を食べ早速スキーの準備をする。後はスキーで下るだけかと思うと、ひじょ～に幸せな気分になる。滑り出しは少し緊張したが、後はひたすらこけないように慎重に滑る。雪質もよく快適である。しかしそんな幸せな気分も15分で終わってしまった。何時間もかけて登った斜面も下りだと『あっ』と言う間である。後は又左にトラバースし樹林帯に入り、木と木の間を滑ると言うよりスキーを履いて歩くといった感じで下る。やがて田の原に戻り少し雪の積もった車道を滑り、《おんたけスキー場》のゲレンデに入る。リフトは営業時間を過ぎておりゲレンデには殆ど人はいなかった。人のいないスキー場を滑るのも不気味なものである。車に戻り生井さん、村上さんと合流し途中中央高速の諏訪湖SAで温泉

に入り帰途に着いた。

八海山駐車場 (9:56) - 笠山 (10:21) - 御岳山頂上 (14:56~15:08)

- 王滝頂上 (15:21~15:40) - 樹林帯入り口 (15:55~16:10) - 駐車場 (16:56)

(高田 記)



94' 春合宿－鹿島槍ヶ岳北壁主稜（敗退）から 天狗尾根ピストン

1994. 5. 1～4

パーティ L 本図一統、佐藤文則、古山正文

この記録は、94' 春合宿－鹿島槍ヶ岳北壁主稜敗退の様子を記したもので、私としては敗退の様子を書くのは気が進まないのですが、生井編集長の『敗退の原因を記録するとともに、転進した天狗尾根登攀の様子を記録せよ』との通達があり仕方なく書いたものです。

最近北アルプスに入る時は良く使うようになったというルート、“下館－50号－高崎－上信越道－佐久－三才山トンネル－大町”で大谷原に着く。

5/1。途中から降り始めた雨は朝になっても止まず、車中の中のシュラフの中でだらだらと時間を過ごす。7時頃にはこの雨の中を出発するパーティが現れるが、この雨の中ではいくら雨具を着ていたとしても下着まで濡れるのは明らかなのと今日は天狗の鼻までなのでまだ時間的に余裕があるだろうということで、ごろごろと車の中で過ごす。本図さんと佐藤君が9時の気象情報で天気図を記録し天気の様子を予測するが、良くないらしい。朝出ていったパーティは雨の中を引き返してきて、橋の下で服を乾かしている、寒そうだ。10時位に日も射すようになり、とりあえず出発することにして準備開始。その間にも雨がぱらつくが出発する頃には止んだ。右岸の車道を歩くことにして出発するが、左岸に渡る橋が取り外されたままになっていて結局堰堤の直前で裸足になり膝上までの徒渉となった。発電所の取水口の橋で右岸に移り川原歩きとなる。少し遅れていた佐藤君が橋を渡らず左岸を進もうとする様子なので、右岸に渡るように合図するが裸足になって徒渉して右岸に移るのに驚く。左から入る荒沢に入りすぐの所で、左岸に徒渉。ここから尾根への木登りをまじえた急な登りとなり、しばらくしてようやく雪稜となる。1600メートル付近でテントを張る。テントは今度の山行のために、購入した“軽量の高級ゴアテックスのテントである”。設営に優れた高級テントをあっという間に張って、中に入るとまたもや雨が降りだした。しとしとと降る雨の音と対岸で起きているらしいブロックの崩れる嫌な音を聞きながらシュラフの中で就寝。

5/2。雨の音で目を覚ます。1800メートルぐらいの所にテント場があるからとりあえずそこまで行ってみるべ、ということになり、朝食を取り出発。幸いガスッ

ているが雨は止んだ。テン場は無言で通過し、第1クロアールを問題なく越える。急な雪壁を登り雪稜を進むと、第2クロアールとなり、ここで50メートルロープを出し、1ピッチで越える。ここからは天狗の鼻は目と鼻の先であるが、急な雪壁の為なかなか進まない。天狗の鼻にザックを置いて、北壁の見えるところまで偵察に出るが、何と北壁の主稜には雪がほとんど無い状態だった！本図さんが単眼鏡を出して様子を見るが、やっぱりダメらしい。そのほとんどがブッシュの登りとなるのである。虚しくザックの所に戻り、テントを設営する。天気図をつけていた佐藤君の話では天気は明日位までは持つらしい。けれども、登るルートに雪は無し！これが敗退の真相である。

5/3。朝6時に、佐藤君を残し、本図さんと二人で鹿島槍北峰をピストンする事にして出発。雪壁を登り、岩場で1.5ピッチの岩登りをし、雪稜を歩いて、2時間ほどで頂上に着く。東尾根にも数パーティ登っているのが見える。頂上付近は風が冷



鹿島槍北峰にて…本図

たく、写真を撮ると早々に下る。岩場で1ピッチの懸垂下降をし、腐った雪となつたいやらしい雪壁を慎重に下りテントに戻る。ゆっくりと朝食のラーメンを食べて、下る事にする。第2、1クロアールで50メートル一杯の懸垂をする。雪稜の下部の方は雪が急速に解けていて一昨日登ってきたときとは全く違う尾根と間違いくらいに変



雪の無い鹿島槍北壁

わっていた。取水口の所に老夫婦がいて、話をすると、『そうですか、カクネの壁は雪が無かったですか。』と、あいづちを打つ。そうか、北壁の事をカクネの壁と言うのか、私も今度からはこの言葉を使ってベテランの振りをしよう。大谷原の川原は最近流行のオートキャンプをしているグループがかなりいて、付近にはバーベキューのおいしそうな匂いが漂っていた。薬師の湯に行って、温泉につかり、宴会用のビールを購入し、再び大谷原に戻り、車の中で、宴会。

5/4。翌朝帰路に着く。途中、常念や蝶ヶ岳が良く見える。今頃、鈴木、村上、長久保パーティが楽しく登っているんだろうね、などと話ながら無事帰宅した。

(古山 記)

北アルプス・蝶ヶ岳

1994. 5. 2. ~5.

パーティ L 村上晴美、鈴木操、長久保加寿子

5月の連休が近づくと山に行きたくて私は、6ヶ月余りも、いやそれ以上!?音沙汰無しにもかかわらず、本図さんに電話をしてしまい、それがきっかけでこの山行計画は生まれた。そして同行してくれる事になったのは、鈴木さん、生井さん、村上さんのはずだったが、当日になって生井さんは、急に行けなくなってしまった。しかし、よほど心配!?だったのか猿島からあんみつを3つ持って、見送りに来てくれた。そんな生井さんに見送られながら忘れ物のない事を確認し、鈴木さんのおNewなパジェロに乗り込み上高地を目指した。

じつは、上高地を訪れるのは今回で2度目であるが前回は河童橋から明神池あたりまでを歩いただけであり、今回はまた違ったものになるだろうと期待していた。また、楽しみにしている事が2つあった。1つは蝶ヶ岳から常念岳の稜線で見られる槍・穂



蝶ヶ岳稜線にて…長久保、村上

高連峰の展望、もう1つは山小屋へ泊まれる事。（私ってやっぱりミーハーかしら！）であった。

今回のルートは、徳沢から長塀尾根を登り、蝶ヶ岳、常念岳へというコースである上高地から徳沢あたりまでは、余裕を持ってあたりの風景や動植物に目をやることができ足取りも軽やかだった。（ここで野生のカモシカに出逢った）。しかし、この先は今までとは違って変わってのつらい登り、長塀尾根の登り始めである。さらに、横尾へ登るパーティが多いらしく私達のコースでの先行パーティは少ないようである。ここで少し不安になるが気を取り直して出発。歩いて歩いて、登って登ったはずだったが稜線にはなかなか立てず本当につらい登りであった。そんな中で元気の源になったのが食べることであり、中でも鈴木さんの作ってくれたフカヒレの卵スープは絶品であった。

そんなことを繰り返しながらの登りで少しずつではあるが自分のペースがつかめるようになってきたかなあと思う頃、赤い屋根が少しずつ見えてきた。今夜宿泊する予定の蝶ヶ岳ヒュッテらしい。そしてようやく稜線に立ち左手には槍・穂高連峰の雄姿が迫力ある様で眼の中に飛び込んできた。私も1度は登ってみたい憧れの峰である。記念撮影はしたものの私の心の中でも永遠に残るものとしてしっかりと焼き付いたようだ。

そして楽しみにしていた山小屋泊。標高も高いせいかジュースの値段も3倍ぐらい高い。また食事のメニューも質素であり、夕食を食べたあとは寝ることしかなく消灯は8時であった。心配なのは明日の天気。この時山は大荒れだった。

翌朝は強風で曇りの天気。常念岳へ向かう予定であったが天候等から断念し、横尾へ下るコースに変更した。

私はこの時の強風で貴重な体験をし、山の怖さというか偉大さ、自分の力を適確に判断し先を読むことの難しさ、判断したことによって生と死は紙一重であること等いろいろ思い知らされることがあった。

その後、蝶ヶ岳の山頂を踏んだ後、稜線から横尾へ一気に下り、この日は横尾山荘に宿泊決定！時間に余裕もあったので、豪華な昼食をとった後近くを散策することになった。ここでもまた野生の動物との出逢いがあった。サルである。誰とは言わないがうちの会の〇〇〇さんに似ているような気がしていたのは私だけではなかったはずだ。また、この日宿泊した横尾山荘はとっても快適であり、お風呂にも入ったし、畳の部屋で布団を敷いて寝ることは出来たし、なんと夕食では主食として肉・魚が両方



横尾にて…鈴木、村上、長久保

登場したのである。満足な幸せいっぱいの時間過ごせた。

翌日は、白骨温泉の泡の湯につかり無事帰途に着いた。

今回の山行は、回りから見れば超楽な山行だったように思うかも知れないが私なりに学びの多い貴重な体験をした山旅でした。

5月3日 沢渡駐車場－(6:10)－上高地(6:40)－徳沢(9:20)－蝶ヶ岳ヒュッテ(16:30)

5月4日 蝶ヶ岳ヒュッテ(8:50)－蝶ヶ岳山頂(9:20)－槍見台着(11:10)－
横尾山荘(11:45)

5月5日 横尾山荘発(7:10)－徳沢(8:05)－明神(8:50)－河童橋(10:40)－上高地タ
ーミナル(10:45)－沢渡駐車場(12:10)－白骨温泉(12:40)－白骨温泉(14:00)
－土浦着(21:30)

(長久保 記)

八甲田・岩木山春スキー

1994. 5. 2～4

パーティ L 菊池光夫、広瀬隆

今年の冬は雪が多く2月3月と毎週のようにボーイフレンドの広瀬君と出かけた。今期スキーの総決算と言う事で八甲田山と岩木山を選んだ。

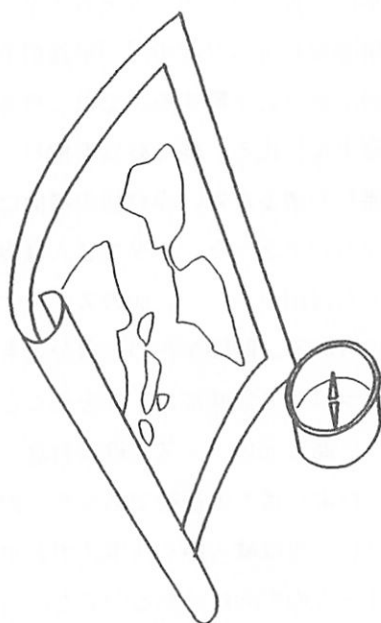
茨城を昼頃出て青森へと向かう、途中仮眠を取り、早朝黒石インターを出る。国道394号を1時間強走り、八甲田のロープウェイがフロントガラスより見えて来た。すると目の前の橋が、工事の為通行不可との事。仕方なく黒石インターまで戻りまた高速に乗り青森インターまでマッハ0.1で飛ばす。下りてから約1時間位で八甲田山ロープウェイに着く。急いで準備をして整理券を取り、ロープウェイに乗る。山頂には見晴らし台があり岩木山が良く見える。天気もキャンパスに書いた様なブルーで気持ちは最高！コースの確認をしてヘタなのだが早速滑る。10分か15分で軽い登りとなり、すると急な斜面があり急下降する。それより赤倉岳を目指してひたすら急登となる1時間半位で避難小屋に出る。軽く昼食を取り、赤倉岳を目指す。

赤倉岳到着後は、登り無しの滑るだけ、赤倉岳の斜面は広大で真平らで見たことのなかったスケールの大きなものであった。ヘタな2人はカメの様にスイスイと下へと滑って行く。どこを滑っても自由……。他のスキーヤーもほとんど豆粒位で見え、ハジをかかないで滑っていられる。時間がたつと自分達も雪に馴染み、コースも残り少なくなって来た為に、トラバース気味にコースを長くにとって滑っていた。何時の間にか、沢を越して下りていた為に元のコースには戻れなくなってしまった。仕方なしに沢筋を下ってしまう。これより苦勞の連続であった。沢を越したいが、越せないし沢筋の為スキーは履けないし、雪は軟らかくスボスボと足を取られる。こね回す事1時間半位かかった。でもコースの方向は分かるので右へ右へとトラバースする。するとコースがあり、元に戻り20分位でほうき場岱の駐車場に着きヘトヘトとなる。循環バスで車に戻り、後半の岩木山へと向かう。

獄温泉駐車場に夜中に着き、朝一番のバスに乗り、リフトに乗り継ぐ急いでスキーをザックに固定して30分位登り、そこより滑り出す。少し行くと15分ぐらいの登りがあったが後は滑るだけの長平コースである。八甲田山と比較すると幅がケタ違いであった。でもコースは標識もあり整備されている。すでに営業の終わったスキー場

まで滑り、バス停で循環バスを待ち、又リフト乗場へと向かう。途中公園があり桜が満開で花見客で一杯であった。今度は百沢コースを滑る事にする。小屋より今度は反対の方向へ滑って下りた。途中にはカタクリの花が色鮮やかに咲いていた。

(菊池 記)



立山山スキー（一の越から御山谷）

1994. 5. 8

パーティ L 古山正文、高田暢年、本図一統

ゴールデンウィーク前半の鹿島槍北壁合宿は、貧雪のため、ブッシュだらけで登攀にならず、天狗尾根だけを登り、早々に下山した。帰りの車の中で、高田と古山が日帰りで立山に山スキーに行くという話を聞く。欲求不満になっていた私は、すぐその話に乗ることにした。

8日、扇沢。数日前まであった早朝の臨時バスは、今日はもう無く、一番バスまで少々待つ。トロリーバスは、たいした混雑もなくダムに着く。私は黒部が好きで、ここにはずいぶんと通いつめている。一般観光客には行くことのできない、黒部トンネル（黒4ダム～黒部第4発電所）や、吉村昭の小説「高熱隧道」で有名な黒部鉄道上部軌道には乗ったことがあるが、この先、室堂までは乗り物では行っていない。黒部平からのロープウェイの眺めは素晴らしかった。ただ、いくらだか忘れてしまった



が、運賃が高いのには閉口

雄山頂上にて…高田。本図

した。室堂に着き、準備をしながら駐車場の方を眺めると、有名な雪の回廊が見えた。さて、一の越目指して出発する。私のスタイルは、ズックを履き、ゲレンデ用の板に

ちょっと工夫を加えて、細紐でひっぱるといった格好。あとの二人はオーソドックスなスタイルだ。一の越までは1時間足らずで着く。早速、雄山に向かう。雄山までは登山者がたくさんおり、雪も少ないのでズックでも何ということはないが、その先、大汝山方面へは雪もバッチリ付いて、クラストしている。運動靴の上にアイゼンを履く。ピッケルの替わりはストックだ。悪いところはなく、大汝山を往復し、一の越に戻る。処分しようと思っていたアイゼンが、こんな所で役に立つとは。

いよいよ待望の滑降である。御山谷は、素晴らしい一枚バーンをみせている。蛇足だが、黒部の方では谷のことを（タン）と発音する。したがって、御山谷はオヤマダニではなく、オヤマタンという。古山の話では、ここも例年よりは雪が少ないとのことであった。トップで私が滑り込む。雪質は、いわゆるフィルムクラストで実に爽快だ。ターンするとき、谷足に荷重すると、その反発が足裏にグーンと感じ、反動で体全体が空中を飛ぶ。その時、クラストした氷の破片は、カラカラと快い音を立てて転がる。最高の気分だ。これがあまりにも嬉しくて、大斜面なのに、パラレルよりもウェデルンで降りて行った（もっとも私のは、ウェデルンといえるほどのものではないが）。この時期に案内してくれた古山に心から感謝する。交互に写真撮影などし



御山谷を滑る本図

ながら快適に降りると、あっと言うまに屈曲点まできてしまった。さすがここまで来

ると、雪も腐り、重くなってきた。ここでティータイムをとる。快い足の疲れと快い風、そして快適な大斜面。山スキーは、こーでなくっちゃねー。これなら扇沢～室堂の運賃も高くは感じない。でもやっぱり高いか（本音）。コーヒーを飲みながら、今日の三人の滑りを思い浮かべてみる。まず今回のリーダーであり、ガイドの古山教授。彼の特徴はダブルストックで体を伸ばし、その後、沈み込み荷重によるパラレルを得意とするようで、深雪が好きだそうである。私の考えでは、おそらくあの滑り方だと、小回りターンは苦手ではないかと思われる。なぜならば、あの滑り方は、早いエッジの切り返しは無理だと思うからだ（間違っていたらごめんなさい）。気が付いたことをもう一つ。谷足側の肩を下げれば、体が安定して転ばなくなるし、もっと格好よくなると思う。しかし、山スキーの経験は豊富で、彼から学ぶ点は数多くある。彼はスキー靴や兼用靴を持たない。登山靴オンリーである。ゲレンデで滑るのも登山靴。この彼のこだわりは、敬服に値する。もし彼がスキー靴で滑ったら、スキーってどうしてこんなに易しいんだろうと思うに違いない。

次は当クラブのチーフリーダー、高田先生。彼は、小回りターンが好きなようである。彼はどちらかというと不器用な人間ではないかと思う。現在の彼を作っているのは努力の賜物だと私は感じる。いやみがなく、会員から好かれる人柄は、チーフリーダーに適任で、「とっても真面目なところが大好き」と、彼の今の同居人が言っていたような気がする。あ～あ勝手にしろ！ごちそーさん！ゲップ！どうやら女性に関してだけは不器用ではなかったらしい。だいぶ話が脱線したが、さて、その不器用な彼が、実にコチョココとよく曲がる。但し、谷足荷重がイマイチのようで、どうしても足が開いてしまうのが難点だ。上体が回転しないように常にフォールラインに向けて、谷足側の肩を下げ、さらに上下動を使えば格好良く滑れると思うよ。

最後に控えしは、ガストンガニマタこと本図の登場です。はっきり言って自分のことは、わからないのであります。深雪がまったくだめなのは、わかっています。持って生まれたガニマタが、岩登りには有効なのだが、スキーには障害となって、技術が伸びないのであります。もっと姿勢を高くし、上下動を使って、かつ、雪面の反動を利用して速く膝を切り替えろ。と、指導員に注意されるのですが、なかなかうまくいきません。来シーズンは深雪をマスターする、を、モットーに一生懸命、勉強しようと思います。ここで、ことわっておきますが、私は手先は器用ですが、人様の物を、かつぱらったこともなく、前科者ではありません。正直にいいますと、仲間のカラビナは、いつも狙っておりますが、いまだに5個位しか手に入れておりません。私は最

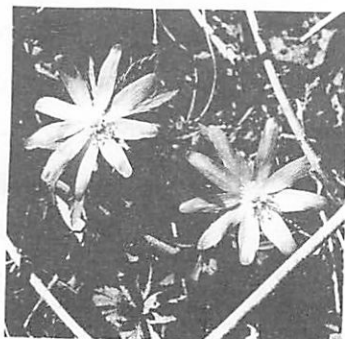
近、方針転換いたしまして、仲間の物より、拾い物に重点をおいています。カラビナ、ハーケン、ハンマー、帽子、現金（1円）など拾いました。でも、それより高価なものを無くしました、ハイ。さらにもう一つ、私は女性には、すごく不器用なので、これから高田先生に、ご指導いただこうと思っております。これで東沢のザイル代はチャラにあげようと考えています。

ここで、内緒だけど、みなさんに重要なことを教えるよ。当会の一番の注意人物は事務局長だよ。事務局長はね、私の雨具をかつぱらって、いまでも返してくれないという前科があるんだ。あまり公にはできないけど、名前は菊地っていうんだ。気をつけたほうがいいよ。このことは他言無用だよ。会社、くびになっちゃったらかわいそうだからね。

さてさて、くだらない事を思い出していると日が暮れてしまうので、下りましょう。ここからは水流が出ており、右岸を流して行く。ブッシュが少々うるさい所もある。黒部湖に出たところから湖岸道をダムに向かう。高田先生の奥さんにプレゼントするフキノトウを採りながら。

扇沢(7:35)－室堂(9:30~9:42)――の越(10:35~10:40)－雄山(11:33)－大汝山(11:43)
――の越(12:24~12:48)－屈曲点(13:10~13:28)－御山谷出合黒部湖畔(13:49~14:10)
－ロジックろよん(14:40)－ダム駅(15:25~15:35)－扇沢(16:02)

(本図 記)



キクザキイチゲ（キンポウゲ科）＊4月下旬

ウメコバ沢中央岩峰凹角ルート

1994. 6. 4

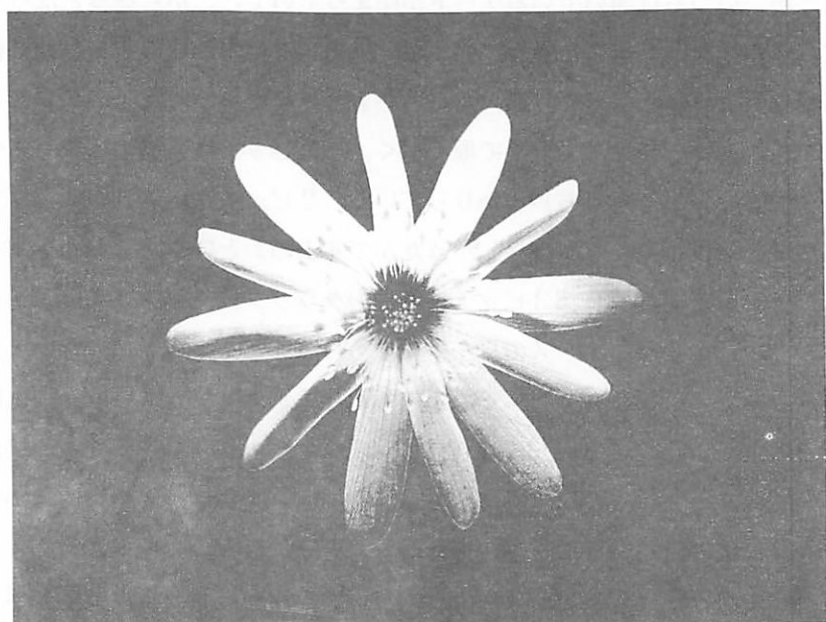
パーティ L 中居康展、古山正文

水曜日の夜に中居君から電話があり、今度の土、日にどこかに行きませんかとの事。中居君は昨年暮れの八ヶ岳天狗尾根以来の山行なので体が鈍っているのでは出来ればゲレンデという希望だったが、相談の結果限りなくホンチャンに近いゲレンデ“ウメコバ沢”に岩登りに行く事に決定。以前に登った事のある中央岩峰凹角ルートにとりあえず土曜日は登ることにして、前夜に出発。松木沢の奥まで入らずに、藤間の町外れの駐車場に高級テントを張り、いつもの通り小宴後就寝。翌朝松木沢を車でウメコバ沢に向かうが、いつもは開いているゲートが閉まっていてここから徒歩となった。1時間ほど歩きウメコバ沢出合に着き、靴を脱いで裸足で対岸に徒渉する。取り付きに着いて岩峰を見上げるとはっきり凹角ルートがまっすぐに伸びているのが分かる。準備を整えて、1ピッチ目私がトップで取り付く。このピッチは適当に残置ハーケンがあり、まずは安心。ビレー点もしっかりしている。2ピッチは中居君がトップで行く。以後つるべで登る。『出だしが嫌らしかったんですね』とぼやきながらもするすると登って行く。ルートの核心部3ピッチ目は右のクラックにフレンズをセットしクラック沿いに登り、途中からフェースの真ん中に埋められてあるボルトに向かい1メートル左に移動した。ここからフェースを直上するらしくボルトが3メートル程上にあるのが分かるのだが、ここは更に左に移りリッジを登り左から回り込んでこのフェースを越える。残置ハーケン1本に1本打ち足しビレーする。4ピッチ目、凹角から小さなリッジを高度感満点にのっこそすが、何とビレー支点は心細いものであった。5ピッチ目、出だしのクラックにフレンズをセットし、凹角を登った後階段となりベツルのハンガーのセットしてあるビレー点でビレー、久しぶりに確実な支点が現れた。この辺りから落石の危険の方が心配になる。セカンドへの落石の注意もさる事ながら、どのルートかよく分からないが下の方にいるらしい別のパーティへの落石にも神経を使わされる。6ピッチ目問題なく登り大きな岩の前に出る。ここは、クラック沿いを登ろうと試みるが意外に難しく、結局右から回り込み草付きからフェースを登り終了。ロープを解き、少し登ると岩峰頂上に出る。昼食後、ルンゼを下り、途中残置支点で懸垂支点を取り、1ピッチ懸垂下降。後はガレ場を慎重に下り、取り付きに戻る。

自分がトップの時はそう悪くは感じなかったが、セカンドの時は何となく悪い感じがしたルートだった。後は疲れる車道を歩き車に戻る。予定では明日も登るはずだったが、予定外の車道歩きで疲れた事と、天気が悪くなるらしい事から予定変更で、筑波に戻った。

取り付き(10:30)ー終了点(14:00)

(古山 記)



キンポウゲ科イチリンソウ属。学名Anemone raddeana。春を告げる純白の舞姫

中央ア・宝剣岳中央稜ルート～二尾根ルート（継続登攀）

1994. 6. 5

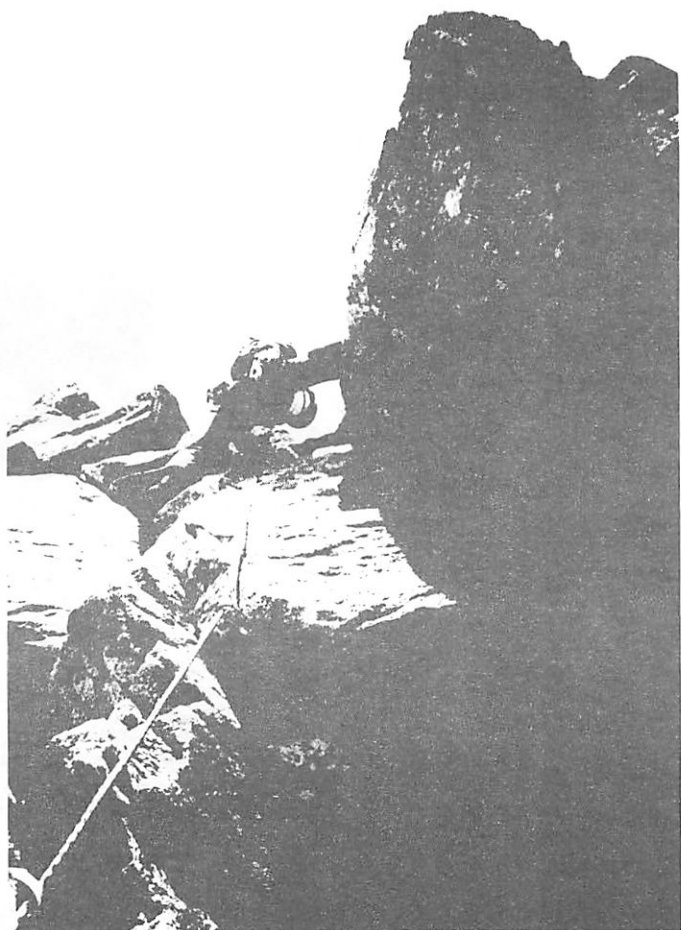
パーティ L 本図一統、高田暢年、生井一男

宝剣岳に来るのは、前は本図さんと二人で極楽尾根に登りに来たとき以来である。あの時は、極楽尾根なんて言うからさぞや楽しく快適な山行になるかと思ったが、実は極楽じゃなく地獄尾根の間違いじゃ無いか、と思う位辛いものだった。

でも今回は、登攀隊は本図、生井、高田、宝剣岳周遊隊に菊池、村上、笹沢の6名での山行とあいなった。菅の台の駐車場でいつものように小宴会を行なった後に就寝。

次の朝、バス、ロープウェイで宝剣岳に向かう。千畳敷カールにはまだ雪渓が残っていてスキヤーが結構滑っていた。その中をコルまでのトレースを登って行く。周遊隊はともかく、我々登攀隊の今回のルートは楽勝な所なのである。途中で周遊隊と頂上での再会を約束して分かれ、我々は中央稜の取り付きへ向かう。雪渓をツカツカツと登り、取り付き到着。ここで公平をきたす為にジャンケンでトップを決める。

結果、高田切り込み隊長



宝剣岳東面中央稜を登る生井

の登場である。1ピッチ目は、そんな訳で私はラストで登らせて頂く。ちょっと残念な気持ちで今日はトップは無しかないと考えて登っていたら、やっぱり有りました。

2ピッチ目は、超高級紳士クライマーこと私、生井が引き受けました。『今回も、きっちりやらせて頂きます！それでは生井！行きま〜す』と一声かけて鍵掛けて。ここから凹角の手前の小ハングをAOで越えて行く（フリーでも行ける）ここは、小ハングを強引に乗り越えてから凹角の所を大股開きで行くのは、宙に浮くようでナカナカ面白かった。その凹角も難なくこなし、オケラクラックへ。本当ならば、オケラクラックの出だしでピッチを切るべきだった。ちゃんとビレー点はあるのは知っていたのだが、又悪い癖が出てオケラクラックの終了部まで（ザイル一杯まで）登ってしまった。後から本図さんが登ってきて『おめえよ、ここでピッチを切んなくちゃ駄目だっぺよ。正規の通りにピッチを切らなくちゃ駄目だっぺよ。フツ』てな事を言っていましたっけ。

このオケラクラックはジャミングが利きて快適でとても面白かった。宝剣山荘辺りから良く見えるんじゃないかな？結構迫力あるように見えるんだろうな〜。



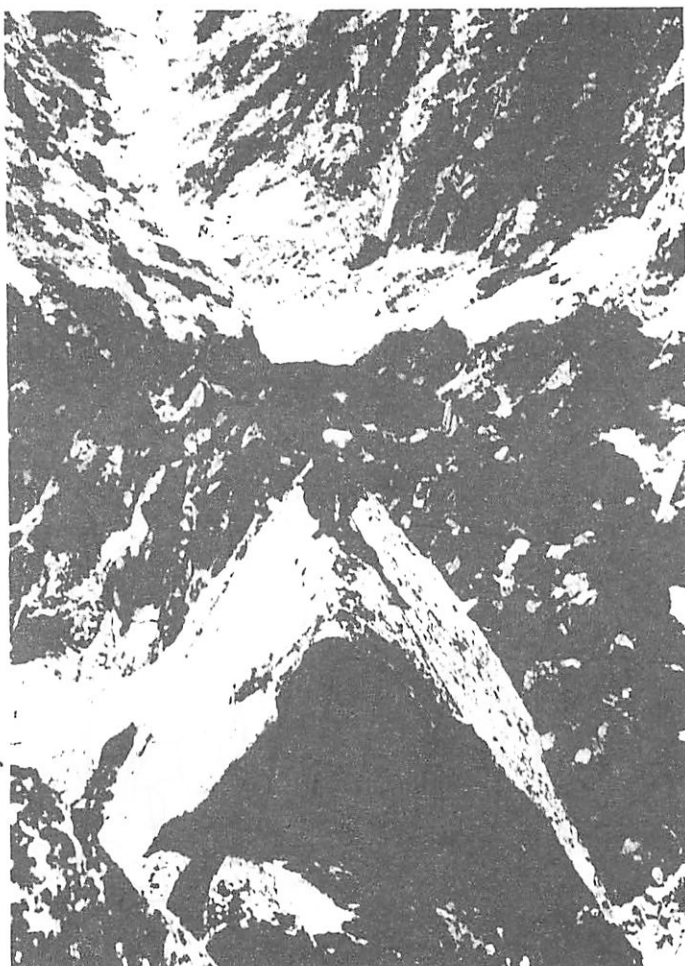
宝剣岳中央稜オケラクラックを登る

何て一人思っただけで登っていました。そして3ピッチ目は本図さんがトップを努めます。そして3人が宝剣山頂に着いた時は、午前11時頃だったと思います。周遊隊の姿は見えず仕方なく我々は、二尾根を登るべく取り付きまでB沢を下った。二尾根は私が、

トップを最後まで努めました。（多分努めたと思う）

出だしは、凹角状のフェースを登り出口をチョックストンで押さえられたチムニーを抜け、緩い階段状のフェースを登り、カンテの中のクラックを左上し足下が空間にせり出して高度感のあるチムニーをくぐり抜けると、顕著なピナクルのある外傾テラス立つ。この上でフェースからナイフエッジになり、ナイフエッジを馬乗りになって渡り、（ここが空中に浮いてるようでナカナカ迫力のある所だった）最後の小岩峰を回り込み大まかなフェースを登り、宝剣岳からの一般道と合流して終了となる。

そして周遊隊と合流して帰途に着く訳だったのだが、何故かいらない。時間的には



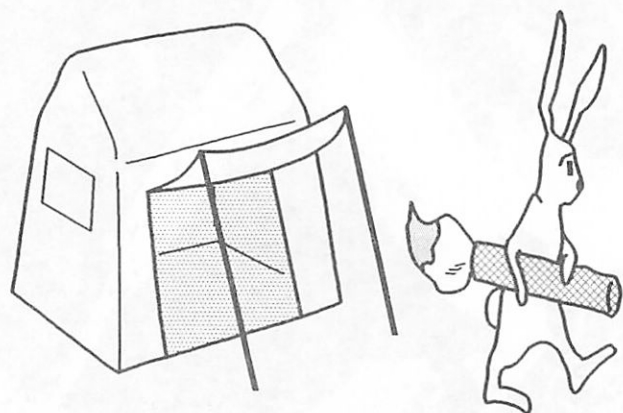
ナイフエッジを登る高田

もうそろそろ来てもいい訳なのに……。近くまで来ていれば聞こえるはずなので頂上から呼んでみる『菊池さ～ん！村上！笹沢！』と呼べど叫べど答えは帰ってこない。我々も頂上から宝剣山荘まで下りて探してみる。居ない。何処に行ったのだろうか？まだ帰ってこないのかとしばらく待つ…。が待てど暮らせど帰ってこない。本図さん曰く、もしかしたら下のロープウェイ駅で待っているかも知れないと言うわけで私、生井に御下命がくだりロープウェイ駅まで降りて居るかどうかを調べに一人下っていった。無線機が無いので手旗信号？で連絡することにした。結果、彼らは居なかった。仕方なく私は一人ぼっちで待つこと数時間、午後4時過ぎに彼らは降りてきた。かな

り雪溪のトラバースで時間がかかったとの事だった。

なにはともかく無事合流して駐車場まで降りて、いつもの諏訪湖サービスのハイウェイ温泉で一風呂浴びて帰途に着いた。

(生井 記)



木曾駒ヶ岳山行

1994. 6. 5

パーティ L 菊池光夫、村上晴美、笹沢ひろみ

今回は、当会のレディースを代表する村上、笹沢そして菊池のトリオで駒ヶ岳の山行となる。

登攀組徒は、ロープウェイ山頂デ（実際には雪渓を少し登った所で）バイバイして木曾駒ヶ岳へ向かう。宝剣山荘辺りまでは足取りも軽く、天気も良かった。ちょうどバテた頃が木曾駒ヶ岳の山頂なのでトリオには、ピットンコであった。

少し休憩をして、コーヒーを飲む。時間もまだ有り、濃ヶ池コースで帰る事にする。これが、とんだ冷や汗物となるとは、その時は考えられなかった。濃ヶ池までは予定通りだった。濃ヶ池は6月なのに雪が深く神社の鳥居も頭を少し出すだけでスッポリ雪の中であった。

池より少し行くと、斜面が現れ第一回目のトラバース約10m位のトラバースであったが急斜面の為滑ると確実に200m～300mは滑って行ってしまうと思われる。下はカール状になっているので命はあってもアバラ骨の2～3本は折れて名医の本図先生のお客様になる事、間違いなしである。（先生は腕はいいのだが請求書を見ると“0”が一桁多い…名医は法外だね）

この第一回目のトラバースは、なんとか越したが、二回目の60m～70mのトラバースの時は、自分はチビリそうな緊張であった。とても難しかった。

村上さんは底があるガントレシューズ。笹沢さんは底のある運動靴。自分は底のヘタっているツルツルの運動靴。10本の指を斜面に立てて、とても冷たい！出も冷たいなどは、言ってもらえない状態。落ちれば確実に、名医のお客に……。

また少し行くと三回目のトラバースが出てきた。ここは80m位有った。棒切れを持ちバランスを取りながら渡る。すると今度はトラバースではとても越せない急斜面が出てきた。上部を偵察してから、下へと下る沢を横切り、灌木体を腕力で乗り越え上を目指す。登山道は、右側に行かないと戻れない事は分かっていたが雪の斜面が恐くて越せない。その為左側の急なガレ場を登る。息が切れるがトリオも必死出会った。這松帯に入ってはいけないのも分かっていたが、どうする事も出来ず横切る。予定の時間をかなり過ぎた為二登攀組が上で心配して、見つめていた。

どうにか、こうにか、上に着く。後はカモシカの様に下って行き、諏訪のハイウェイ温泉で汗を流して帰途に着く。

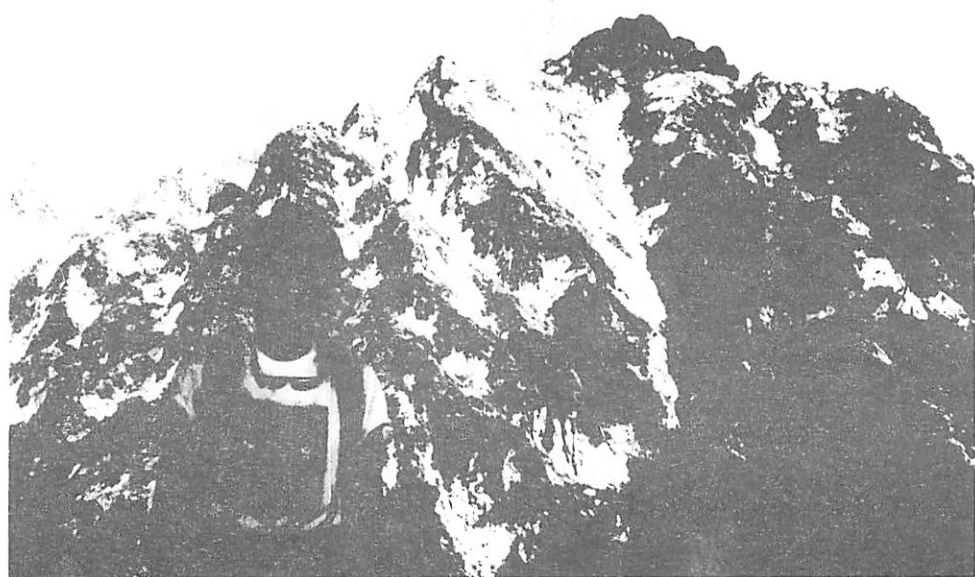
(菊池 記)



青年海外協力隊に参加するにあたって

私が、山登りに興味を持ったきっかけは、前の会社で剣岳に登った事だったのですが、ACC-Jに入ってから、皆さんと一緒に山行をさせていただき、山の喜び、楽しさ、苦しさ、恐ろしさ等いろいろな事を学ばせて頂き有り難うございました。

この度、青年協力隊に参加することになりまして、3ヶ月の研修の後今年の暮れから2年間の予定で、ケニアに行く事になりました。言葉、生活、仕事等に不安が胸をよぎるのですが、折角のチャンスなので、頑張って無事任務を果たして来たいと思っています。ケニアは、（隣国ですが）キリマンジャロ、ケニヤ山、サファリもあるし、海もありますので、皆さんで遊びに来てくれると嬉しいなと思います。多分、私の住む所は狭い所だと思いますので、テントとシュラフを担いで来てください。それと米、味噌、醤油、梅干し、日本語の本等を持ってきて下さると大変嬉しく思います。



剣岳をバックに…村上

振り替えてみると、月日はあっという間に過ぎ去った様に感じられますが、これから先の2年を思うと、全く未知の事ばかりですので、果てしなく長く遠い高い山に挑む様な気持ちです。辛い事、苦しい事、泣きたい事等数え切れない程起こると思いますが、そんな時は、皆様と行った山での辛く苦しかった事、楽しかった事等の思い出を思い浮かべ、何とか乗り切ろうと思います。多分、外に出る事によって見近に何気なくいた人や、見慣れた景色等が、こんなに大切なものかと改めて感じられるのだと思います。精神的にも肉体的にも鍛えられて一回り位大きくなって帰ってきたいと思いますので、その頃には、ヒマラヤのB、C位いやいや第一キャンプ位か第二キャンプへの荷上げに参加できるかも知れません。ACC-Jの皆様と再会し、神々の座ヒマラヤの麓で語り合う日々を楽しみにしております。

最後に、皆様の健康とACC-Jの更なる発展をお祈り致しまして結びの言葉とさせていただきます。今まで、本当に有り難うございました。

(村上晴美 記)



ACC-J 茨城会則

第 1 章 総則

(名称)

第 1 条 (1) 本会は、Alpine Climbing Club Of Japan 茨城と称す。

(2) 略称を ACC-J 茨城と称す。

(所在地)

第 2 条 ACC-J 茨城事務局を会長宅におく。

(会の構成)

第 3 条 本会は、ACC-J 茨城会員、及び O. B で会則に賛同した者で構成する。

第 4 条 本会は、茨城県山岳連盟に加盟する。

第 5 条 本会員は、本会則の各章各条の規定を厳守せねばならない。

第 6 条 本会は、会活動を通じて会員相互の親睦を計り、登山に関する知識、技術を習得すると共に、体力の錬磨をもって冬期岩壁登攀を目的とする。

第 7 条 本会は、J I I Y A L のコールサインを持つ、アマチュア無線局を有する。

第 2 章 組織

第 8 条 本会は、会長 1 名を会員より選出する。

第 9 条 本会は、チーフリーダー 1 名を会員より選出する。

第 10 条 本会は、事務局長 1 名を会員より選出する。

第 11 条 本会会長は、必要に応じて会員及び O. B を召集することができる。

第 12 条 本会チーフリーダーは、必要に応じて会員を召集することができる。

(3 役)

第 13 条 本会会活動の目的を達成する為、3 役会を置く。

第 14 条 3 役は、会長、チーフリーダー、事務局長で構成する。

(1) 会長は、唯一の会の代表者である。

(2) 会長は、会計監事も兼任する。

(3) 会長は、茨城県山岳連盟理事を 1 名選出する。

(4) 会長は、必要に応じて副会長 1 名を選出できる。

(5) 副会長は、会長を補佐し、会長に事故あるときは、それを代行する。

(6) チーフリーダーは、会員の決議事項を尊重する。

(7) チーフリーダーは、会員より退会したい旨の連絡があった場合、支障のないことを確認(会費滞納、装備借用、その他)の上、承認する。

(8) チーフリーダーは、会員より休会希望、休会期間の延長希望、及び、休会中の他会へへの入会希望があった場合、承認、不承認を決定する。

(9) チーフリーダーは、会員より O. B になりたい旨の連絡があった場合、承認、不承認の決定をする。

(10) チーフリーダーは、合宿、及び会山行で、会員の遭難の報を受けた時は、

直ちに救助隊を編成、出動しなければならない。第55条(4)、第86条、第87条、第92条の通り、休会者の山行、O. B.の山行、会員外との山行については、本会の救助隊は派遣しないを原則としているが、人命救助を第一と考え、緊急を要する場合は、チーフリーダーの裁量によって、本会の救助隊を派遣することができる。又、第89条により、チーフリーダーが最良と思われる救助方法をとることもできる。

- (11) チーフリーダーは第103条(1)にかかわる交通事故の連絡をうけたときは、速やかに交通事故処理委員会を設置しなければならない。
- (12) チーフリーダーは、必要に応じてサブリーダー1名を選出できる。
- (13) サブリーダーは、チーフリーダーを補佐し、チーフリーダーに事故あるときは、それを代行する。
- (14) 事務局長は、会長、チーフリーダー、会員との連絡を密にとり、事務局運営にあたる。
- (15) 事務局長は、会計、集会議事録、山行記録、会員募集、会報発行、山岳保険、会装備などを管理しなければならない。
- (16) 事務局長は、必要に応じて事務局長代理1名、及び事務局員数名、会報編集長1名を選出することができる。
- (17) 事務局長代理は、事務局長を補佐し、事務局長に事故あるときは、それを代行する。
- (18) 事務局員は、事務局長多忙の時、それを手伝う。
- (19) 会報編集長は、年4回、会報を発行する。
- (20) 会報編集長は、必要に応じて編集員数名を選出することができる。

第15条 3役会は本会の重要決議機関であり、決議に対して本会員は誠意をもって協力しなくてはならない。

第16条 会長は、その権限内において処理すべき問題が生じた場合、その問題が重大で、会長個人で処理することが困難な時は、3役会で協議決定する。

第17条 チーフリーダーは、その権限内において処理すべき問題が生じた場合、その問題が重大で、チーフリーダー個人で処理することが困難な時は、3役会で協議決定する。

第18条 事務局長は、その権限内において処理すべき問題が生じた場合、その問題が重大で、事務局長個人で処理することが困難な時は、3役会で協議決定する。

第19条 3役会は、会員、もしくは入会しようとする者が、第46条(1)、(2)項にかかる決定を希望した場合、速やかに承認、不承認の決定をしなくてはならない。

第20条 3役会は、会員及びO. B.が本会員にふさわしくない行為(無断山行を含む)があった場合、これを除名処分、又は、退会処分にする権限を有する。

第21条 3役会は、年度末にその年の登攀賞表彰者を選出し、総会時表彰する。

第22条 3役の任期は、1年(冬山合宿後から次年度冬山合宿終了まで)とする。但し、再任は妨げない。

第3章 会計

- 第23条 本会の運営は、会員よりの入会金、会費、及びO. B会費をもって行う。
- 第24条 会計年度は、1月より12月までとする。
- 第25条 会費は月1000円、入会金は5000円、O. B会費は年6000円とする。
- 第26条 会費及び入会金、その他会員より徴収する経費の変更は、総会において議決する。但し、緊急的に一時徴収が必要になった場合（会装備購入など）は、集会時、協議決定しても良い。

第4章 総会

- 第27条 総会は、会員の2/3以上の出席（委任状を含む）をもって成立する。
- 第28条 定期総会は、年1回とし、臨時総会は、必要に応じて会長が召集する。
- 第29条 総会は、会計報告、年間活動報告及び必要議決事項を協議決定する。
- 第30条 協議事項は、出席者（委任状を含む）の過半数の賛成をもって議決される。

第5章 会報

- 第31条 本会は、年4回、会報を発行する。
- 第32条 会報の誌名は、R&V (Rock and Valley) とする。
- 第33条 会報の編集は、編集長及び編集員が行う。
- 第34条 編集長は、会員に提出期限をつけて原稿を依頼することができる。
- 第35条 会員は、編集長から依頼された原稿を提出期限内に提出する義務がある。但し、正当な理由あるときはこの限りではない。

第6章 会員制度

- 第36条 入会金及び会費を支払って会員とする。
- 第37条 会山行及び集会に出席する義務がある。
- 第38条 会費、会山行及び集会に6カ月以上連絡のない者は退会処分にする。
- 第39条 会員は、全員、山岳保険に加入する義務がある。（受取人は本会とする）
- 第40条 会員は、できるかぎりアマチュア無線局免許を取得する。
- 第41条 会員は、会装備を使用できる権利を有する。
- 第42条 会員は、会装備を使用する時は、あらかじめ事務局長に許可を取らなければならない。
- 第43条 会員は、会装備を使用した後は、出来る限り速やかに、事務局長に返さなければならない。
- 第44条 会員は、会装備を紛失、又は破損した場合は、弁償しなければならない。但し、正当な理由ある時はこの限りではない。
- 第45条 会員は、本会員にふさわしくない行為があった場合、除名処分されることがある。

第46条 会員は、他会との重複加入は認めない。但し、次の(1)、(2)については認めることもある。

- (1) 学校内の同好会、職域山岳会
- (2) 遠方からの長期出張者で、すでに入っている会を休会中の場合。

第7章 合宿制度

第47条 合宿は、春、夏、冬の3回行う。

第48条 合宿は、全員参加を原則とする。

第49条 合宿日程は、遅くとも実行日より2ヶ月前に、集会で計画発表する。

第50条 合宿参加者は、参加申し込みをチーフリーダーに、申し込み期限内に連絡する。申し込み期限を過ぎた者は、参加を拒否されることがある。

第51条 合宿同日程の個人山行、及び会員外との山行は原則として認めない。

第8章 登攀賞

第52条 会員より1名、その年(1月～12月)に最も素晴らしい登攀、または精進努力した者を表彰する。但し、一定水準に達した者がいなかった場合は、表彰しない。

第53条 表彰の賞品は、5000円相当の山に関する物とする。

第9章 入会、休会、復会及び退会

第54条 入会希望者は、所定の必要書類に必要事項を記入し、チーフリーダーに提出し、入会金、会費、その他(山岳保険など)の経費を納める。

※18才未満の者が入会する場合には、親の入会同意書が必要となる。

第55条 休会希望者は、その旨をチーフリーダーに連絡し、チーフリーダーの承認を得なければならない。但し、在籍期間などによって承認されないこともある。

- (1) 休会者は、その期間中、会費を免除する。
- (2) 休会期間は、最長2年までとする。但し、正当な理由がある場合はこの限りではない。
- (3) 休会者は、その期間中、本会会員との山行を禁止する。但し、チーフリーダーが認めた山行については、この限りではない。
- (4) 休会者は、その期間中、遭難した場合、本会としての救助隊は派遣しない。但し、第14条(10)による場合は、この限りではない。
- (5) 休会者は、その期間中、会員にふさわしくない行為があった場合、除名処分にする。
- (6) 休会者は、その期間中、他会に入会することができる。但し、休会者が遠方への長期出張などの場合で、チーフリーダーが承認した場合に限る。
- (7) 前項(6)の者が復会する場合には、その会を退会しなければならない。
- (8) 休会者は、復会する場合、入会金を免除する。

第56条 退会希望者は、チーフリーダーにその旨を連絡する。

第10章 O. B

第57条 当人の都合でO. Bになりたい時は、チーフリーダーにその旨を連絡して、承認を得なければならない。但し、在籍期間などによって承認されないこともある。

第58条 O. Bは、会運営に参加できない。

第59条 O. B会費の年6000円は、一括納入すること。

第60条 O. Bは、なるべく山岳保険に加入する。

第61条 O. Bは、会報を自宅まで郵送される権利を有する。

第62条 O. Bが会装備を使用する時は、会員が使用しない時に限られる。(会員が優先される)

第63条 会員、又はO. Bが遭難した場合、できる限り救助に出動する。

第64条 O. Bは、何らかの事情により遠方に転居した場合、他会に入会することができる。その時は速やかに、その旨をチーフリーダーに届け出なければならない。ただし、復会する場合には、その会を退会、もしくは休会することが条件となる。

第65条 1年間以上、会費納入がなかったO. Bは、このO. B資格を失う。

第66条 O. Bは、O. Bたるにふさわしくない行為があった場合、除名処分となる。

第67条 O. Bは、復会する場合、入会金を免除する。

第11章 会山行、個人山行、O. Bの山行 会員外との山行、無断山行

第68条 会山行は、不定期に行われる。

第69条 会山行は、全員参加を原則とする。

第70条 会山行は、訓練山行を主体とするが、集中山行、新人歓迎山行なども含まれる。

第71条 会山行は、遅くとも実行日より1ヶ月以上前に、集会時、計画発表する。

第72条 会山行同日程の個人山行、及び会員外との山行は原則として認めない。

第73条 個人山行は、計画書をチーフリーダーに提出し、承認された後、実行する。但し、当日前夜、電話連絡でも承認する場合がある。チーフリーダー不在の場合は、サブリーダー、会長、事務局長でも良い。電話連絡の場合、出発前に必ず計画書を書き、家族、もしくは適当と思われる人に1通渡しておくこと。(山岳保険の関係)

※ここでいう個人山行とは、会員、もしくはO. Bとの山行のことをいう。

第74条 個人山行は、終了した時点において、即刻チーフリーダーにその旨、連絡する。

第75条 会員外との山行は、計画書をチーフリーダーに提出し、承認された後、実行する。

※ここでいう会員外との山行とは、会員、もしくはO. B以外との山行のことをいう。

- 第76条 会員は、会員との山行を最優先し、会員外との山行が中心になってはならない。
- 第77条 会員外との山行は、終了した時点において、即刻チーフリーダーにその旨、連絡する。
- 第78条 本会の他、学校内の同好会、職域山岳会に所属している者が、それらの行事の山行をする場合、あらかじめ山行計画書をチーフリーダーに届け度ること。
- 第79条 チーフリーダーが不承認した山行を強行した場合、退会処分となる。
- 第80条 無断山行を行った者は、その時点に於いて退会処分になる。
- (1) ここでいう山行とは、一般的にいう家族向日帰りハイキングコースは含まない。(例、筑波山など)
 - (2) ここでいう山行とは、ゲレンデスキーは含まない。
 - (3) ここでいう山行とは、岩登りゲレンデのトレーニング山行も含まれる。但し、人工壁は含まない。
 - (4) 無断山行が無断山行でないかの最終判断は3役会がする。
- 第81条 山行終了後、代表1名は集会にて山行報告をしなければならない。
- 第82条 O. B山行を行う場合、なるべくチーフリーダーに届け出るようにする。
※ここでいうO. B山行とは、O. BがO. Bと、もしくはO. Bが会員外と、の山行のことをいう。

第12章 ザイル祭

- 第83条 会員の安全を祈願するため、年1回、ザイル祭を行なう。
- 第84条 会員全員参加を原則とする。
- 第85条 本会のザイル祭を、ナーゲル祭と呼ぶ。

第13章 遭難対策

- 第86条 会員が遭難した場合には、チーフリーダーは、会長及び事務局長に連絡し、遭難救助隊を編成しなければならない。但し、O. Bの山行及び会員外との山行において遭難した場合は、本会としての救助隊は原則として派遣しない。チーフリーダー、サブリーダーが不在の時は、その時点で適任と思われる者が代行する。しかし、第14条(10)項により、本会の救助隊を派遣することもある。
- 第87条 全会員は、遭難救助に出動する義務を有する。正当な理由なくして拒否できない。但し、O. Bの山行及び会員外との山行において遭難した場合は、出動する義務はない。その場合、個人の責任において出動するのは一向かまわない。しかし、第14条(10)項により、本会の救助隊を派遣する時は、義務となることもある。
- 第88条 チーフリーダーは、承認した山行の下山予定時間を、24時間～48時間過ぎても下山報告がなかった場合、会長と協議の上、直ちに救助隊を編成し出動する。但し、出動を決定する時間は、その時の季節、気象条件、ルートなどによって、早くしたり遅くしたり、多少変えても良い。

- 第89条 チーフリーダー及び会長は、本会だけで救助できない時、もしくは救助することが著しく困難と判断したときは、ACC-J東京、茨城県山岳連盟山岳救助隊、及び、ヘリの使用を含めた最良と考えられる救助を依頼することができる。但し、チーフリーダー（サブリーダー）及び会長（副会長）が不在の時は、その状況に一番適任と思われる者が代行できる。
- 第90条 会員が遭難した場合、本会の遭難救助隊の指揮はチーフリーダーがとる。但し、チーフリーダー、及びサブリーダーが不在の時は、その状況に一番適任と思われる者が代行できる。
- 第91条 遭難救助隊の諸費用は、山岳保険で賄う。但し、山岳保険で賄いきれなかった場合は、当事者が負担する。（本会の救助隊の日当は無料）
- 第92条 本会の他、学校内の同好会、職域山岳会に所属している者が、それらの行事の山行において遭難した場合、原則として、本会としての救助隊は派遣しない。但し、個人の責任において出動するのは一向かまわない。しかし特例として、第14条（10）項により、本会の救助隊を派遣することもある。
- 第93条 遭難パーティの中に山岳保険未加入の者がいた場合（たとえばO.Bなど）、その者の負担分は、全額個人負担となる。
- 第94条 茨城県山岳連盟山岳救助隊員になっている者は、茨城県山岳連盟より出動の依頼を受けた時は、万障繰り合わせて出動する。

第14章 交通費用、交通事故関係

- 第95条 山行の際、交通機関にマイカーを利用した場合、本会規定によって交通費用は平等に負担する。
- 第96条 山行の際、交通機関にマイカーを利用した場合、運転は全員平等に行うこと。但し、運転免許を取得していない者はこの限りではない。
- 第97条 山行の際、交通機関にマイカーを利用した場合、移動中は、運転する者しない者共に、行き帰り、車中車外にかかわらず、いっさいの飲酒を厳禁する。
- 第98条 マイカー利用中、何らかの理由にて、それが故障破損した場合、その修理費用は当事者が協議し、平等に負担する。但し、常識を著しく逸脱した運転により発生した故障破損については、運転手本人が負担する。
- 第99条 マイカーで移動中、交通違反にて課せられる罰金及び反則金は、当事者で平等に負担する。但し、常識を著しく逸脱した運転により発生した交通違反については、運転手本人が負担する。
- 第100条 山行に使用するマイカーは、任意保険（対人無制限、対物1000万以上、搭乗者1000万以上）に加入していなければならない。
- 第101条 山行に使用するマイカーは、年齢条件、21才未満無担保を最低条件とする保険に加入していなければならない。
- 第102条 山行に使用するマイカーは、なるべく車両保険に加入すること。
- 第103条 不幸にして交通事故発生時の事故処理は

- （1）その山行が、会合山行の場合、交通事故処理委員会が援助するが、賠償請求等、解決に至るまでの交渉は、当事者及び車両所有者が中心になり保険

会社を介して行う。交通事故処理委員会は、事故発生後、速やかに設置する。交通事故処理委員会のメンバーは3役の他、事故当事者、必要に応じて会員から選出した者で構成する。但し、常識を著しく逸脱した運転により発生した事故については、交通事故処理委員会は設置しない。

※交通事故発生の時、当事者は速やかにチーフリーダーに連絡すること。チーフリーダー不在の時は、それに準じた者で良い。交通事故処理委員会を設置するのは、集合場所から目的地、そして解散場所までの範囲内に発生した事故の場合とする。従って、現地集合の場合は、範囲外となる。

(2) その山行が、個人山行、O. B. の山行、会員外との山行の場合は、当事者が行う。

第104条 交通事故による損害賠償問題が発生した場合、任意保険を使用するが、任意保険補償額を越えるような高額なときは(第100条を前提として)

(1) その事故が、前条(1)の場合、全会員は、交通事故処理委員会を通じて、できるかぎりの金銭的援助をすること。また、交通事故処理委員会は、O. B. に対してもカンパを募ることができる。但し、常識を著しく逸脱した運転により発生した事故については、全会員、及び、交通事故処理委員会は関知しない。

(2) その事故が、前条(2)の場合、当事者が協議し、支払う。

第15章 葬祭規定

第105条 会員、会員の親、会員の配偶者、及び会員の子供が亡くなった場合、本会規定によって香典を供する。

第106条 O. B. が亡くなった場合、本会規定によって香典を供する。

第107条 会員が結婚した時は、5000円相当の記念品を贈呈する。

第16章 改則

第108条 本会の会則の改正は、3役を通じ、総会にて出席者(委任状を含む)の過半数の賛同をもって行われる。但し、軽微な改正については、集会にて行われる。

第17章 附則

第109条 本会則は、平成6年7月27日より効力を発する。

《友好山岳団体の月報、会報、その他紹介》

ありがとうございました

月報

◎Rohman NO. 108 1994. 4 B5 16P 浦和浪漫山岳会

北ア・坂巻温泉～上高地小梨平、奥利根・雨ヶ立山(布引尾根左稜～右稜下降)、川内・中杉川源流周遊

◎Rohman NO. 109. 1994. 5 B5 36P 浦和浪漫山岳会

春山合宿報告 北ア・北方稜線、毛猛連山・太郎助山～毛猛山～前毛猛山、会津・巽沢山、谷川岳～赤谷川下降～阿能岳～靱山ほか

◎Rohman NO. 110. 1994. 6 浦和浪漫山岳会

奥秩父・滝川水晶谷、西上州・大ナゲシ・悪沢、山岳雑誌大研究その1-戦前編・1ほか

◎月報・ZAC NO. 152 1994. 4 B5 8P グループ・ゼフィルス

蔵王越え、火打山、日光湯元スキー場～前白根山～白根隠山ほか

◎月報・ZAC NO. 153 1994. 5 B5 28P グループ・ゼフィルス

尾瀬・大清水・皿伏山～アヤマ平～山の鼻～ススガ峰～山の鼻・燧ヶ岳～御池、田代山～帝釈山、飯豊・蒜場山～大日岳・梅花皮小屋・石転び沢～長者原、尾瀬・大清水～尾瀬ヶ原、朝日・伊東岳への道、博士山、鳥海山・湯ノ台～河原宿温泉～伏拝岳、北ア蓮華岳・扇沢～針ノ木雪渓～針ノ木峠～蓮華岳、鍾温泉スキーおさめ、ほか

◎月報・ZAC NO. 154 1994. 6 B5 8P グループ・ゼフィルス

笛吹川・鶏冠谷右俣、笛吹川・東沢釜ノ沢、大菩薩・丹波川小室川谷ほか

◎わらじ NO. 457 1994. 4 B5 10P わらじの仲間

上越・荒沢山足拍子川前手沢左稜、北ア・鹿島槍ヶ岳荒沢尾根～赤岩尾根ほか

◎わらじ NO. 458 1994. 5 B5 10P わらじの仲間

若さんの山登り周辺の風景ほか

◎わらじ NO. 459 1994. 6 B5 10P わらじの仲間

春の集中山行計画ほか

◎逍遙 NO. 35 1994. 4 B5 6P 逍遙溪稜会

谷川・平標山、鹿児島・開聞岳、丹沢・中川川押出ノ沢ほか

◎逍遙 NO. 36 1994. 5 B5 4P 逍遙溪稜会

上越・タカマタギ山、丹沢・谷太郎川鳥屋待沢右俣ほか

◎逍遙 NO. 37 1994. 6 B5 4P 逍遙溪稜会

奥秩父・大皿川、奥多摩・長久保沢、御坂山塊・大幡川四十八滝ほか

◎山紫水明 NO. 1 1994. 5 B5 20P 山旅の会

白神山地・ニッ森、那須・苦土沢支流井戸沢、白神山地・赤石川、太平山岩見川加護瀧沢、加賀山塊・堀内沢八滝沢～マンダノ沢ほか

◎峻嶺 NO. 4 1994. 5 B5 11P 遡行クラブ神奈川

春山合宿 至仏山・御池、剣岳・北方稜線 別又尾根・毛勝山・大明神沢下降、戸隠・P5稜・P1尾根下降、奥多摩水根沢谷、両神山、丹沢・早戸川本間沢ほか

◎峻嶺 NO. 5 1994. 7 遡行クラブ神奈川

◎帰ってきました1994. 5 B6 4P 同人・栗と栗鼠

解散もしなかったし第2次という気もしないけど

◎すずらん14, 15号合併号 1994. 3 B5 245P 鈴蘭山の会

92年度の記録、山スキー=小谷温泉から天狗原山・雨飾山、一ノ倉岳から芝倉沢、月山、鳥海山、岩木山、新日本オーソルートなど14本、沢登り=南会津・袖沢中門沢、北ア・黒薙川北又谷、谷川・湯絵曾川本谷など8本、その他=谷川・一ノ倉沢烏帽子奥壁中央カンテ、一ノ倉沢2ルンゼ〜Aルンゼ、蕎麦話しなど6本、93年度の記録、山スキー=カナダヘリスキー、南会津・三ツ岩岳、岩手山、巻機山、北ア・柳又谷横断など16本、沢=足尾・庚申川、飯豊・飯豊川本谷、下田・光来出川、越後・下津川本谷など14本、その他=谷川・一ノ倉沢第3スラブなど5本、ほか

◎おちこち NO. 2 1994. 4 B5 80P 笠間おちこち山の会

日光男体山、5月の槍ヶ岳、徳本峠、谷川岳一ノ倉沢中央稜、南稜、剣岳ハツ峰Cフェース、早月尾根、加賀白山、南ア・北岳、屋久島・宮之浦岳・縄文杉・白谷雲水峽ほか

◎あをい NO. 43 1994. 3 B5 74P 水戸葵山岳会

昭和61年度から平成4年度までの記録、剣岳源治郎尾根、チンネ左稜線、北ア・抜戸岳南尾根、北ア・鎌尾根・鹿島槍ヶ岳、1987年ヨーロッパ、ハツ・権現岳東稜、鎌倉山、最近の御岩山ほか

◎あをい NO. 44 1994. 5 B5 41P 水戸葵山岳会

稲葉幸郎会長追悼号、第1部は会員の追悼文、第2部は遺稿集になっている、稲葉幸郎氏のご冥福をお祈りします。

以上、閲覧したい方は本図まで

＊編集後記

6月に、庄司真陸くんが転勤で退会。そして8月で村上晴美さんが青年海外協力隊としてケニアに行くので2年間休会し、馴染みの顔が見られなくて寂しくなりますが、ここに来て新しい会員がどっと増え、何となく私としては世代交代の時期なのかなと一人思う今日この頃です。私も今まで会に入って人の出入りをかなり見てきましたが、今回の様にこれだけの新人が、入って来たことは過去に例を見ないと思います。いずれは彼らが、ACC-J茨城を今以上に盛り上げてくれる事だろうと思います。その為にもこれからも、彼らの足跡を残していきたいと思います。ですので原稿依頼があったらすみやかに書いて、締め切りに遅滞ないようにお願いします。

7月27日に行なわれた臨時総会にて、会則の一部変更がありましたのでこの13号にに掲載致しました。

(伊集院 記)



季報[R&V]第13号 発行1994年 春号

発行者：鯉河仁志

発行所：ACC-J茨城 〒306-06 茨城県猿島郡猿島町逆井318

生井一男方

編集者：伊集院 忍
